

『私の主張』

終戦五十年を迎えて

上杉清喜

(会員 佐伯市中川原)

昭和二十年八月十五日、かの終戦を佛印で迎えタイ国バンコックに集結、其処で連合国英印軍に投降。名前はともあれ実質的には捕虜生活が始まった。武装を解かれた軍隊の哀れさ、各部隊毎に集結して檻に入れられた動物よろしく、僅かの餌をもらってひたすら故国への帰りを待った。

こうした中であつて我々自動車隊は、次々に進駐してくる彼等の兵器・弾薬・燃料・建築資材等々、ガソリンさえ補給すれば無傷の自動車と操縦手とを意の如く使えらるとあつて、運送屋よろしく彼等直轄の光栄？に浴したのであつた。英軍からは毎日必要車数と使役場所が本部に届き、これを各隊毎に区処して出動、彼等の指示に従うのであるが、半端な英語では用が足せず、その為外国駐留経験のある商社マンや英語専攻の大学生等々、対話

に事欠かぬ将兵を師団から抜擢し各隊に配属してもらつたので、彼等との言葉の不便は皆無であつた。こうして在タイ十数万の軍人及び在留邦人の故国送還を全部終わり、タイ国最後のせんがり殿軍として二十一年十一月復員したのであつた。

この間タイ国人及び進駐して来た英印軍の印象は今も脳裏に鮮明である。終戦当時は宿舎から命を受けて夫々の任地に赴く途中で、街中のタイ人からよく石を投げられていたが、いつの間にか石に代わつてバナナ・パイヤ・煙草などを投げられるようになった。一方、日々出向いて行く目的地には、必ず将校・下士官・兵若干名がおり、将校の指示に従つて下士官・兵が夫々区分けをして我々を使役するのであるが、将校は殆ど英国人で下士官・兵は印度人が主であつた。将校は配属の通訳に必要事項を伝え、終わるとあとは印度人の下士官・兵にまかせて立去つていたが、その時彼等は後姿に向かつて必ずといってよい程「唾」を吐くのである。やがて姿が見えなくなると我々に向かい、腕をまくつて、皮膚の色は同じではないか、と極めてなつかしげに語りかけて来る。お世辞にも彼等の色と同じとは言いがたいが、白人に支

配されている屈辱感が同じ有色人種の東洋人という親近感に、えも言えぬ喜びを感じているのが肌に伝わってくる。ついこの前まではお隣りのビルマでは日本軍を相手に苛烈な戦いをして来た連中も、この中には随分いる筈なのにその敵に対し、しかも戦勝国の兵でありながら、何故かくも我々に親しきみをもつてくるのであろうか。思わずその黒い掌を握りしめた。これが同じ部隊で同じ所に行くのならとも角、毎日毎日がそれぞれ異つた所に配置され、相手も凡て違うのである。それが言い合わせた様に似たようなしぐさをする。ベテランの通役付なので話の内容は凡て分かる。冷ややかな面ざしで所要の指示をして立去る白人の英軍将校、片やより親近感をもつて接してくる黒人の下士官・兵。これが戦勝国の同じ部隊の者かと奇異にさえ感じられた。そうしてこの状態は一年三ヶ月程タイ国を離れるまで、日を追う毎に強くなつて続いた。黒い掌をさし出して共々に起ち上がるのではないかと、固く手を握られた時など胸があつくならない。この印度兵達のしぐさは捕虜という不遇の中にあつて、どれ程我々の心にやすらぎを与えてくれたことか。終戦の時「怨に報いるに徳を以てせん」とかの有名な蔣

介石総統の名言によつて、幾十万の在支日軍は如何に温情を以て処遇されたことか、心ある大方の国民は知つてゐるであらう。(これは終戦時既に始まつていた国民・共産両党内紛のため、殆ど無傷の在支日軍の兵器を有利に収めたいという野望もあつてという穿つた見方もある。)ともあれ在支の日本軍が極めて優遇されて復員出来たことは事実である。終戦の間際火事場泥棒よろしく満州へ雪崩こんで、多くの日本人を殺傷したソ連兵とは比ぶべくもない。印度兵、石からバナナに代わつたタイ人、そして前述の中国等々皆ひとしく有色人種であり、しかも佛教の教えがその根底に流れている国々である。

最近政治家、学者先生、マスコミ等々太鼓を鳴らしはやし立て、「悪いことをしました。すみません。罪はつぐないます。」等々内に外にあやまり続けている現状を見聞するにつけ、戦後英印軍の捕虜として毎日毎日を肌で感じ、目で見耳で聞いて体得した者にとっては、果たしてそれがあの戦いのすべてであつたのかと首をかしげたくなる。当時はかのA B C D包圍陣によつて首を締められ、座して餓死するか起つて戦うか、二つに一つの道しかなかった。卑下と自虐としか喜びを感じない連中の

高言には、憤を通り越して淋しくなる。

あの抑留中に感じたもの―それは民族の血の近さ。白人対東洋人の対決であったことをしみじみと体で会得したものだ。

ここで『断乎NOと言える日本』（石原慎太郎、江藤淳著）の言葉を借りれば、「だが私が直接会って聞いたことですが、かつて第三世界のリーダーナセル（元アラブ連合大統領）やスカルノー（元インドネシア大統領）も、「日本がああ戦いをしてくれなかったら我われは解放されなかつたらう」と言っていたものです。それが戦争という人間の現実に関する相対的な意味合いというものだ。日本がああ戦争に参戦していなかったら、現代の世界は依然として有色人種に対する白人の植民地支配が続いていたでしょう。それが好ましいものでないことは誰の目にも明らかで、その構造を日本がひっくり返したのです。たしかに自らも植民地支配をした日本にも多くの責任はある。しかし太平洋戦争の「功罪」ということを語るなら、このことは「功」として挙げるべきものです」と述べておられる。あの戦争をきっかけに如何に多くの国々が白人の支配から独立したことか、それは厳然

とした事実である。

もう一年程前になろうか、NHKの市ヶ谷台云々と題した教育テレビで、東京裁判の折り只一人日本無罪論を唱えて万丈の気を吐いた印度のバル判事が、法廷に入る時九被告に対し合掌して入った姿をかいま見た時、何とも熱い思いにかられたと涙声で話されたのを見て、当方もついこみあげて来たものを覚えていた。（当時法廷で現実に見ておられたので、おそらく三十才台の有力な方であつたのだろう。勿論名前も地位なども覚えていないが、八十才台の高令の方であつた。）そのバル博士が、日本無罪判決の中で述べている次の条はあまりにも有名である。引用しよう。

「現代の歴史家さえも次にように考えることが出来たのである。即ち、今次大戦について云えば真珠湾攻撃の直前に、米國務省が日本政府に送つたと同じような通牒を受取つた場合、モナコやルクセンブルグ大公国でさえも、合衆国に対して鉾をとつて起ち上がったであろう」と。

さて、史談会にも我々にとつても、最も身近な終戦五十年と言えば佐伯海軍航空隊であろう。佐伯湾に集結し

た連合艦隊は暮れも迫った十一月十七日、曉の白波を蹴立てて乾坤一擲の決戦場へと急いだ。まさに大東亜戦争の幕は此処我が佐伯に於いて切つて落とされたのである。

「史談会」は文字通り歴史を談ずる会である。が故に発刊以来諸々の身近な郷土の歴史について研究し勉強し尋ね探し、各種各様に造詣の深い有志の発表陳述によって、蒙を啓かれ今日に至っている。

五十年前世界の檣舞台(?)に活躍した佐伯海軍航空隊、今もなお当時の建物と長島山腹及び周辺の防空壕、燃料庫、トンネル、掩体壕等々戦時中の遺構が数多く現存している。当時のままの姿で施設が残っているのは全国的にも数少ないという。樺牟礼山・城山・国木田独歩等も身近なものとして大いに学ばねばなるまい。また、遠く近くは、古墳佛像古文書等々これ又結構である。しかし、より身近でよりスケールの大きい佐伯航空隊(防備隊)は最も新しい歴史の生きた証拠として現存しているのに、この歴史には蓋をしたまま論ずることさえタブーとして今日に至っているのが現状ではなからうか。佐伯よりも後に出来た宇佐航空隊は、これにまつわる歴

史を後世に残すべく、着々と作業を進めているのを新聞等で見聞きする。一方鶴見町の躍進ぶりには目をみはるものがあるが、これは丹賀、鶴御崎の砲台を基軸に踏まえているように思う。

人、物、その他諸々、その存在は大きいとはいえないが、野岡在住の佐郷幸治氏を陣頭に佐伯航空隊にまつわる勉強会「歴進会」が発足している。大東亜戦争は何故戦わねばならなかったのか、佐伯航空隊はどの様に戦ったのか、現存する往時の遺構とどうとりくんだらいいのか等々、史談会としても生まれてなお日浅い歴進会の活躍に期待し、更に応援し共々に学んで行きたいものと私は考えます。

註 文中では太平洋戦争と大東亜戦争を統一せず区別していますが、これは作者の希望によるものです。